

パトリック・モディアノにおける夢想-幼年時代・起源への回帰-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部・文学研究科 公開日: 2015-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小谷, 奈津子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16969

パトリック・モディアノにおける夢想

—幼年時代・起源への回帰—

仏文学専攻 小谷 奈津子

[要約]

小説『夜のアクシデント』（2003年）出版の際、モディアノは雑誌のインタビューで、自らの小説の創作過程について「書く」段階の前に「夢想に没頭する」段階があることを明かすと同時に、夢想の雰囲気そのままに作品を描くことの難しさを示唆している。夢想はモディアノにとって創作の源であるといえよう。この夢想とは、仏文学において、ルソーの『孤独な散歩者の夢想』以来19世紀ロマン派の作家らによって書き続けられた素材・テーマであるが、モディアノにとっても『夜のアクシデント』においては重要なテーマとなっている。モディアノの筆のもと、夢想はどのように描かれ、小説の中でどのようにとらえられているのだろうか。この小説は、語り手が20歳の頃に夜遅くパリのピラミッド広場で車に撥ねられ、病室でぼんやりと事故のことを思い出す場面で幕を開ける。事故直後、若い語り手は車を運転していた女性と一緒に救急パトカーに乗せられ病院に運ばれたところまで記憶しているが、その後、別のクリニックの病室で目を覚ます。クリニックを出るときに、彼はお金の詰まった封筒を渡され、見知らぬ男から事故の報告書を受け取る。このように始まった物語は、事故にあった頃に語り手が知り合っていた人々の記憶の断片や夢の中の残像（事故前）と、報告書に記載されたわずかな情報をもとに車を運転していた女性ジャックリーン・ボーセルジャンを見つけ出そうとする探求の物語（事故後）とが主に交錯しながら展開していき、そこに語りの現在からそう遠くない過去の出来事や事故よりずっと以前の幼年時代などの思い出が織り交ぜられていく。本の最後でようやく描かれるジャックリーンとの再会で、事故当時の語り手の状況がわずかながら明らかになる。このようなモディアノ独特の時間をさまよう不確かな語りによって、過去の他の作品にもみられる孤独な若者の脆い青春が描かれている。発表を通して、まず、作品の冒頭、事故の後クリニックのベッドに横たわる語り手を通して、夢想は「思い出す」という行為と深く結びつき、夢想の展開・深化がほぼ段階的に描かれているのが明らかになった。次に、両親を暗示する場面において、占領期を想起する言葉が散りばめられ、作家の実人生との繋がりが暗示されており、モディアノのエクリチュールの特徴がこの作品にも確認できた。また、夢想による語り手の思い込みによって、時間的に隔てられた二つの異なる出来事が結びつけられていくために、読者は不確かな語りの中で漂っているような感覚に襲われる。この夢幻的な感覚こそ、モディアノが彼の小説の中で常に追及しているものであり、この『夜のアクシデント』において、作家は夢想を用いてその目をくらませるような語りの効果を巧みに演出しているのではないだろうか。

キーワード：パトリック・モディアノ、夢想、占領期